

● IBM iは多彩なOSSやオープン系技術が利用できる素晴らしいプラットフォームである

● PHPを筆頭に、IBM i上でのオープンソース・ソフトウェア (OSS) の利用推進に取り組む「OpenSource協議会 - IBM i」。そのキーメンバー4人が、現在の活動状況とIBM i市場でのOSS動向、そして利用のメリットを語り尽くす。

IBM iでのOSS普及を目的に 多彩な技術情報を共有・発信

奥村 IBM iの販売に携わるビジネスパートナーが中心となって、IBM i上でのオープンソース・ソフトウェア (OSS) に関する啓蒙と技術情報の共有を目的に、2006年6月に「Open Source協議会 - IBM i」(以下、協議会) が発足しました。この年、IBM i上でPASEを利用してPHPが使えるようになったのをきっかけに、PHPを中心にしたOSSの活用を軸に、オープンなプラットフォームとして進化を続けるIBM iのよさを訴求しようと、メンバー各社が結集したわけです。

武藤 メンバー企業の技術者がコミュニティを介してOSSの最新動向を共有し、OSSを取り入れた具体的な業務アプ

リケーションの共同開発や動作検証を実施して、OSS活用を推進する活動を展開してきました。2014年10月現在で、31社のビジネスパートナーが参加しています。

北原 協議会の発足から8年が経過し、少なくともPHPの活用促進に関しては、一定の役割を果たしたと言えるのではないのでしょうか。IBM iビジネスに携わるベンダーの間には、IBM iでPHPを有効に活用できるという認識が広まり、PHPに関する多種多様な技術情報も共有されています。IBM i上でのPHPによる開発事例も確実に増えてきました。

川島 発足当初からPHPだけに限定していたわけでは決してなく、多様なOSS、さらに言えばJavaなどを含めたオープン系技術も対象にしてきました。最近では、その領域が一



奥村 捨吉氏

JB アドバンスド・テクノロジー株式会社
セールスマーケティング
営業推進部
クラウドサービスグループ



武藤 元美氏

株式会社福岡情報ビジネスセンター
代表取締役社長



北原 征夫氏

ティアンドトラスト株式会社
システム開発担当
部長



川島 光雄氏

ソリューション・ラボ・横浜 株式会社
ソリューション事業本部
事業推進グループ
スペシャリスト

層の広がりを増してきたように感じます。たとえば開発言語としてのPHPだけでなく、PHPアプリケーションである「SugarCRM」や、ECサイト構築ツールである「EC-Cube」、ERP & CRM システムである「Compiere（コンピエール）」といった基幹領域のアプリケーション、あるいはセキュアな通信を実現する「OpenSSL」、オープンソースのETLとして有名な「Talend Open Studio」など、アプリケーションから開発言語まで、多彩な分野のOSSを取り上げています。

北原 今年のiSUC札幌大会では、協議会として、「RubyでIBM i 新規アプリケーションを作ってみよう！」という実習型セッションを担当しています。世間で広く利用されているRuby言語をIBM i に移植したオープンソース言語としてのPowerRubyを、IBM i 技術者の方々に広く知っていただくという狙いです。今までのiSUCのセッションではPHPが中心でしたが、ここでもIBM i 市場におけるOSSの変化と広がりを実感しますね。

奥村 IT市場では次々に新しいテクノロジーが登場していますが、それを牽引しているのは、今やIBMやマイクロソフトといった1社のベンダーではなく、オープンソースのコミュニティです。ユーザーの課題を解決するツールやアプリケーションはベンダーロックインではなく、コミュニティで育てていく時代ですから、協議会も時代の流れに沿って、その使命を果たしていくことが重要です。

IBM iユーザーにとっての OSS活用のメリット

武藤 OSSがIBM iユーザーにもたらすメリットはいろいろあります。RPGで開発した基幹システムのプログラム資産を継承しつつ、PHPなどを使ってフロントエンドをGUI化する。あるいはPHPやRubyを使って、新しいWebアプリケーションをIBM i上で開発し、基幹システムと連携するといった刷新ニーズは根強く、これからもいろいろな形でお客様に提案していくことになるでしょう。ただ私個人としては、「開発言語を語る時代」は終わったのではないかという実感があります。クラウドサービスの拡大もあり、IBM iを基盤にしたクラウド上で、あるいはお客様が導入されている現在のIBM i環境で、スピード感をもちつつ、確実にお客様の課題を解決



できるサービスとして、OSSをいかに効果的に活用するかという点にテーマが移っていると感じています。

川島 確かにそうですね。ただ一方で、RPGによるこれまでの運用の歴史もあり、「自分たちが必要とする業務や機能は自分たちの手で作る」という内製主義のカルチャーが色濃いの、IBM iユーザーの特徴でしょう。PHPを採用しても、できればちょっとした修正や追加開発は自分たちの手で、と望んでおられるお客様が多いのも事実です。その点、PHPで作られているSugarCRMやEC-CubeなどOSSのアプリケーションであればソースが公開されているので、そのソースを見ながら勉強し、自分たちの手でメンテナンスするカルチャーを維持していくことが可能です。

北原 コスト効果という点でも、OSSの利用には注目したいですね。限られた予算の中で新たな要件を実現する場合、OSSの利用によってコストにメリハリをつけられます。たとえば情報系ではOSSのアプリケーションを最小限のカスタマイズで導入し予算を抑える一方、ビジネス的に重要な箇所は

必要なコストをかけて手組みで作り込むなどの方法が考えられます。また OpenSSL のような UNIX 系のツールも数多く IBM i に移植されており、オープン系サーバーと同じ技術が利用できることを認識していただく必要があると思います。

オープン系サーバーと同じ技術が IBM i で利用できる

奥村 協会のメンバー企業、そして IBM i に携わるビジネスパートナーは、Windows や Linux などのオープン系環境と同じように、PHP をはじめ多彩な OSS を IBM i で利用できるという認識が定着していると思います。ただユーザーの方々もそのことを十分に理解しておられるのかというと、残念ながらそうとは言えません。

北原 その点では IBM も、そしてベンダーである我々も努力が足りないと言わざるを得ませんね。実際のところ IBM i で PHP を利用できることをご存じないユーザーの方は、今も少なくありません。IBM i は既存のシステム資産を継承しつ



つ、新しいテクノロジーを導入していける非常に優れたプラットフォームです。でもそのことが理解されず、「Windows や Linux で利用できる技術やツール、アプリケーションが IBM i では使えないから」と思い込んで、オープン系のサーバーへ移行するユーザーがおられるのは本当に残念なことです。

武藤 私も同感です。大半のオープン系技術、そして多くの OSS が IBM i 上で利用できるにもかかわらず、「使えないから」「レガシーだから」という理由で IBM i から Windows や Linux サーバーへ移行したユーザーがその後、どれほど苦労されたかという事実を、私は数多く目にしてきました。移行を後悔されているユーザーは少なくないし、結局 IBM i へ戻ってこられたお客様もおられます。その事実を、できるだけ多くの IBM i ユーザーに伝えていきたいと思っています。

川島 実際のところ、現在の ILE RPG では Java や PHP と連携することで、相当なことが実現できるのですが、そのこと自体、あまりお客様には知られていないと思います。だから当社では、RPG から Java のクラスを直接呼び出すことで 5250 アプリケーションを Web サービスと連携させたり、基幹システムですでに開発されている在庫更新共通プログラムは、PHP で新たに開発せず、既存の RPG を PHP から呼び出すなど既存資産の有効活用をご提案しています。まず RPG 環境のままでもここまでできると理解していただいたうえで、Java や PHP の利用をお勧めしています。

奥村 IBM i は非常に安定した信頼性の高いプラットフォームであり、既存資産の継承性が極めて高い。この稀有な特長は一方で、何も新しいことに挑戦しなくても、とりあえず今までと同じように使っていけることでもあります。だからある意味、新しい技術を勉強する機会が奪われているとも言えますね。ここはベンダーサイドとしても反省点として、IBM 任せにせず、情報を積極的に発信し、新しい技術を学ぶ場を創り出していかなければなりません。

IBM i はレガシーではない その理解をどう進めるかが課題

北原 IBM i に関する最新情報は IBM からいろいろと発信されていますが、POWER プロセッサや OS、ハイパーバイザー



などの優位性は語られても、ユーザーの課題を解決する技術や手法、製品やツール、ソリューション、そしてOSSなどの活用法が語られる機会は少ないように思います。

武藤 私はさまざまな場で、そうした観点から見たIBM iのよさを積極的に伝えるように努力していますが、いつも多くのユーザーの方々にご参加いただき、いろいろな質問をお受けします。ユーザーの側でも、そうした情報を強く求めておられるのを肌で感じます。

奥村 協議会は当初の狙い通り、ビジネスパートナー間でOSSに関する多彩な情報を共有し、内部に向けて活発に発信してきたと思います。でも今後は外に向けて語り、協議会が独自に考案したOSSのマーケティングを展開していく必要があるのかもしれない。これは本来の協議会の目的とは少し異なり、そもそも協議会は実ビジネスの領域には踏み込まない趣旨で活動してきましたから、難しい面はあります。しかしそれはIBM iのプラットフォームとしての優位性、そしてOSSの強みをよく知る我々の役割だと考えるべきでしょう。



川島 「こんなことを実現したい」「こんなことはできないか」といったお客様が抱える現在の課題に対して、IBM iは必ず解決策を提供できるプラットフォームであることを理解していただきたいし、私たちもそう努力すべきですね。

北原 その通りです。IBM iの開発経験に富んだRPG技術者は、基幹システムを作り上げるスキルには素晴らしいものがあります。ここにOSSなど新しい技術の力が加われば、IT技術者として無敵と言えるでしょう。自分たちのその強みと強固な立ち位置に気づいてほしいと、強く思います。

武藤 たとえば最新のポータルやコミュニケーションツール、そしてCAMSSと呼ばれる新たなソリューション領域が、今まで作り上げてきた業務システムと同一プラットフォーム上でまったく問題なく実現し、共存できる。IBM iはこれまでも、そしてこれからも、ベストな選択だということを多くの方々に理解していただけるよう、協議会としてもっと活動領域を広げていきたいですね。①